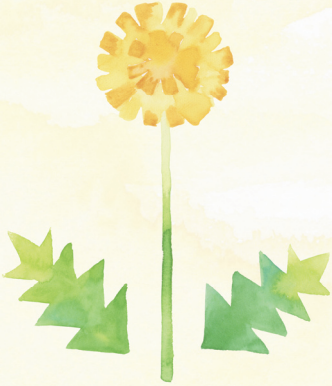
多様な性を知るために

Tayou na SEI wo shirutameni



日本福音ルーテル教会

はじめに

神さまが世界を創造なさった時に「お造りになったすべてのものを御覧」になって、「見よ、それは極めて良かった」と語られたことは、この地上に生きる私たちすべての者にとって、とても大きななぐさめです (創世記 1:31)。

けれども、私たちの世界には、そして教会の中においても、この言葉を遮るような現実があり、そのために不安におびえたり、生きる力をそがれていく人たちがいることを私たちは知っています。特に、性をめぐる事柄については、教会が性的な役割分担を正当化したり、性をめぐる事柄をタブー視し、また聖書の特定の箇所を理由として、性的マイノリティの人たちの存在や、生きる権利を否定してきた現実がありますから、教会の中で語りあわれたり、当事者の声に耳を傾けたりする機会も、なかなか得られないままであったという事情があります。

性 (セクシュアリティ) の事柄については、ひとによって受け取り方がさまざまですから、自分の感性にあわないと感じられる場合に、理解しようという思いを遮断してしまいたくなることがあるかもしれません。けれども、あなたも私も、どのようなセクシュアリティの人にとっても、この教会という場が、極めて良いという祝福を感じられる場所になっていくために、神さまの作られた世界、望んでおられる教会のあるべき姿を追い求めていきたいと願います。そのために委員会で話しあいながら、この小冊子をつくりました。力およばず、不充分なところもあると思いますが、巻末の参考文献と併せて、教会において学びを深めていくきっかけになればと願っています。そして同時に、この小冊子が、社会や教会の中にあって、周囲に打ち明けることが出来ずに様々な思いを抱えておられる性的マイノリティの人たちの、自己肯定の思いを強めるものであってほしいと願っています。

2020 年 3 月

日本福音ルーテル教会 社会委員会

1．「女」か「男」であることを求められる社会

私たちは子どものころから、日常生活の中で否応なしに自分の性別を意識させられます。

私たちがそれを意識するはるか以前から、まず親が洋服を着せることによって、女らしくあること、男らしくあることを期待しますし、学校に入ると、男女別の名簿や制服があり、トイレや更衣室の利用、運動会の競技種目、健康診断も別々ですし、試験の答案用紙にも性別欄があります。さらに社会に出てからも、様々な身分証明書で区別され、性別に応じた職種や役割が求められることになります。私たちは家庭でも社会でも、そして教会でも、自らの性別、性役割を意識せずに過ごすことは難しいのですが、そこで意識させられる性別は「女」か「男」かのどちらかに二分されてしまうのです。

2．性別をはかる物差しは４つある。

性別を知る物差しは４つあるといわれます。私たちは生まれたときに、まず体の性という１つの物差しによって確認され、その性別による性的な役割が期待されるようになりますが、実は、成長するに従ってそのことに違和感を覚えるようになる人たちも少なくありません。そこで、性全体を見ていくために、次のような他の物差しが必要になってきます。

(1)　体の性　　(男 or あいまい or 女)
(2)　性自認 (心の性)　　(男 or あいまい or 女)
(3)　性的指向 (好きになる相手の性)　(男 or あいまい or 女)
(4)　表現する性　　(男 or あいまい or 女)

これらの物差しについて、順に見ていくことにしましょう。

(1)「体の性」について

生まれた時に女の子、男の子ですよと言われる性別ですが、外性器・内性器・性腺・染色体の状態やホルモンのレベルから判断されます。身体的にはっきりした女の人、男の人以外にも、それぞれがはっきりしない性分化疾患と呼ばれる人もいます。

(2)「性自認 (心の性)」について

自分の性別のことを自分自身でどう思っているか、ということです。育っていく過程の中で、少しずつ意識するようになると思われますが、「女」と「男」以外にも、「どちらにもあてはまらない」、あるいは「どちらにもあてはまる」と自覚する人もいます。心の性とも表現されますが、「もともと心に性別はないのではないか。またその表現では、男女がよりはっきり区別されてしまう」と感じて、心の性という言い方を避ける人もいます。ここでは「性自認」と呼んでいきます。私たちの性自認には、次のように多様なひろがりがあります。

①トランスジェンダー (Ｔ)　：体の性と性自認が一致していない

・ＦｔＭ(Female to Male)　：体が女性で性自認が男性のトランスジェンダー

・ＭｔＦ(Male to Female)　：体が男性で性自認が女性のトランスジェンダー

②エックスジェンダー (Ｘ)：自分は男でも女でもないと思う・男でも女でもあると思う・男と女の間だと思う・ゆらいでいる・両方を行き来している、など

③シスジェンダー：体の性と性自認が一致している

(3)「性的指向 (好きになる相手の性)」について

恋愛対象として意識する相手の性別のことをいいます。かつては「性嗜好・性志向」という言葉も使われましたが、人が男女のどちらに惹かれるかは、自分の意志ではなく、その人の中にある方向性の問題だということで、「性的指向 (性指向)」と呼ばれるようになりました。この性的指向も人によって様々なのですが、たとえその人数に多い少ないがあったとしても、正しいとか間違っているというような問題ではありません。世界保健機関 (WHO) は、1990 年に性的指向はいかなる意味でも治療の対象ではないと明言していますし、日本精神神経医学会もこれに倣っています。

①ホモセクシュアル (この用語を不快に感じる当事者もいます)：同性愛者
　・レズビアン　　(L)：女性に性的指向が向く女性
　・ゲイ　　(G)：男性に性的指向が向く男性
②バイセクシュアル　(B)：両性愛者＝男女に性的指向が向く人
③アセクシュアル　　(A)：男女に性的指向が向かない人
④パンセクシュアル　(P)：好きになった相手の性別が重要な要素ではない人
⑤ヘテロセクシュアル　　：異性愛者

また、性自認・性的指向について、自分の性自認や性的指向がはっきりしない。よくわからないという人たちもおり、クエスチョニング (Q) という言葉でそのことを表現することもあります。

(4)「表現する性」について

服装や言葉遣い、立ち居振る舞い等で表現する「女らしさ」「男らしさ」があります。学校や職場、家庭、あるいは教会での「女らしい」「男らしい」役割等です。「女らしい」役割や、「男らしい」振る舞いを大切と感じる人もいますし、これまでの社会的な役割 (ジェンダー・ロール) にとらわれずに、それを表現している人たちもいます。

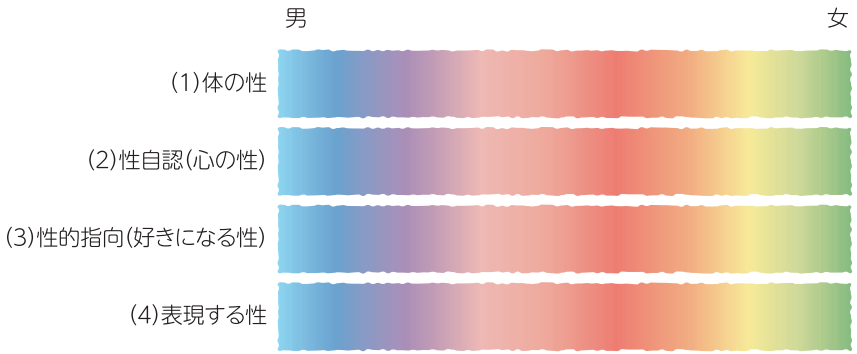
3．4つの物差しはそれぞれグラデーション

私たちの性別というのは、このような４つの物差しの組み合わせによって決まってきます。そのほんの一部を例を挙げるなら、次のようになるでしょう。

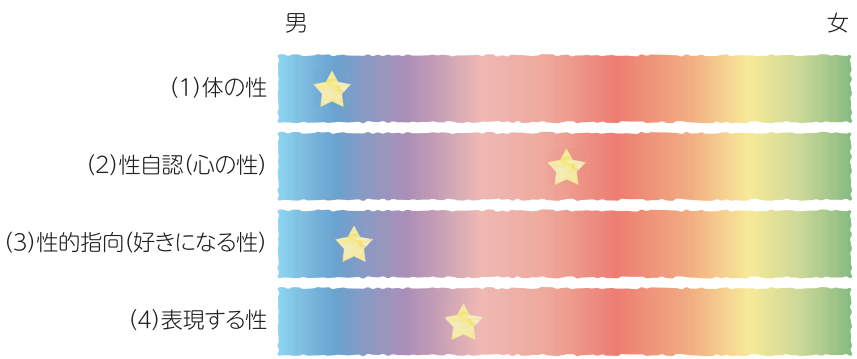
	体の性	性自認(心の性)	性的指向(好きになる性)	表現する性
Aさん	女	男	女	あいまい
Bさん	女	女	男	女
Cさん	あいまい	女	男	女
Dさん	男	あいまい	男	男
Eさん	男	男	どちらにも向かない	男

そして実際には、それぞれの物差しに「男 or あいまい or 女」という３つの目盛りがある、というわけではなく、Ｄさんのように性自認が揺れ動いたり、Ｅさんのように男女のどちらも恋愛対象とならなかったり (アセクシュアル)、表現する性が曖昧であったり、ひとりひとりの物差しは無限に異なっているともいえるのです。いうならば私たちは、ひとつの色には決められない、グラデーションの中を生きている、といっ

てもよいでしょう。ですからわたしたちは、次のような、性についての４つのグラデーションの物差しをもっていると考えると、多様な性を理解しやすいかもしれません。



たとえば、自分が「ゲイ」であると自覚しているＤさんは、４つの物差しのそれぞれの項目について、自分は次のようにあてはまる、と考えました。



今、これを読んでくださっているあなたも、自分はそれぞれの物差しのどのあたりに位置するのかということを、改めて考えてみてください。誰かと完全に一致することはないのではないでしょうか。また、先ほど説明したバイセクシュアルやアセクシュアル、パンセクシュアルの人なら、どのような物差しになるのかも想像してみてください。この物差しによってもはかりきれない、という豊かな世界がそこに広がっているのです。人はひとりひとり異なっていて、簡単に「女」と「男」に二分出来るものではない、ということをイメージしていただけたでしょうか。

4．性的マイノリティとマジョリティ

このような４つの物差しではかった性のありようを、単なる男女の性別ではなく、「セクシュアリティ」と言います。

〈体の性〉×〈性自認 (心の性)〉×〈性的指向 (好きになる性)〉×〈表現する性〉＝セクシュアリティ です。

セクシュアリティとは、「人間一人ひとりの人格に組み込まれた要素のひとつである」(世界性科学会議“性の権利宣言”1999 年) と宣言されています。セクシュアリティは、個人の人格の一部であって、他者から強制されたり奪われたりされてはならない、とされているのです。

私たちの実感によっても、また様々な調査によっても、「体が女性で性自認も女性、好きになるのは男性」、あるいは「体が男性で性自認も男性。そして好きになるのは女性」、というシスジェンダー・ヘテロセクシュアルの人たちの割合が多いのは確かだろうと思います。つまり性的なマジョリティ (多数者) です。けれども、これまで説明してきたように、家庭にも、学校にも、会社にも、教会にも、様々なタイプの性的マイノリティの人たちが生きて、暮らしています。こうした人たちを、

レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダーの頭文字をとって、LGBT と表現します。また、それ以外の性的少数者の人たちを含めて、よりその総称を表すために、LGBTs という表現も使われています。

5．理解しあってともに生きる

近年、芸能人やタレントさん、スポーツ選手など、性的マイノリティであることを公にする「カミングアウト」をした人たちをテレビで見ることが多くなりました。けれども、性的マイノリティが特定の職業に多いというわけではなく、どんな職業にも当事者はいるのです。そして多くの性的マイノリティの人たちが、自分のことを誰にも打ち明けることができずに苦しんでいます。なぜなら、告白をしても相手に理解してもらえないだろうという不安があり、またカミングアウトしたら差別を受けるという現実が厳然としてあるからです。そして、誰かに打ち明けたり、多くの人に公表することができた人たちも、そうしたカミングアウトに至るまでには、第三者には想像できないほど悩んだり、迷ったり、苦しんだりしてきたのです。学校を対象にしたある調査から当事者の声をひろってみましょう。

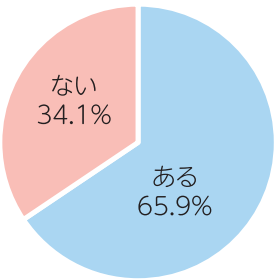
○レズビアン・ゲイ・バイセクシュアルの生徒たちが苦痛だったこと

- 「ホモ」「おかま」「おねえ」と言われる。
- 男同士仲良くしていると、「あぶなくない？」と言う。
- 「ゲイは嫌いだ」と言っている先生がいた。
- 男同士で仲良く遊んでいると、先生が「そんなことをしているとホモになるぞ」と言った。

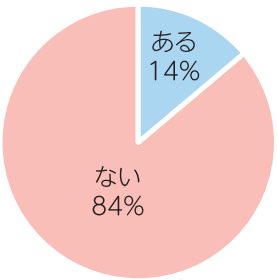
・「あの人って、男？女？」と聞こえるように言う人がいる。
・保健の授業で、「思春期になると、みんな異性を意識する」と言っていて居心地が悪かった。
・男子トイレに入るのが嫌だった。
・(体の性は男性だが) 身体測定で男子だけ上半身裸で待機するのがとても嫌だった。
・修学旅行でみんなと一緒にお風呂に入るのが嫌で休んだ。
・「彼女いる？」「彼氏いる？」と聞かれるのが嫌だった。

2015 年には、同級生から LINE グループにゲイであることを暴露された一橋大学の大学院生が、授業を途中で抜け出して校舎から転落死 (自死) するという痛ましい事件が起こりました。「あいつは実はゲイだ」などと、本人が望んでいない形で同性愛者だと暴露することを「アウティング」といいます。好奇心からの詮索ももちろんですが、たとえ支援するつもりの善意の行動であったとしても、本人の望まない形でのアウティングは当事者の苦しみに直結してしまうことがありますから、不注意なアウティングにも、気をつけておかなければなりません。

自殺を考えたことがある



自殺未遂をしたことがある



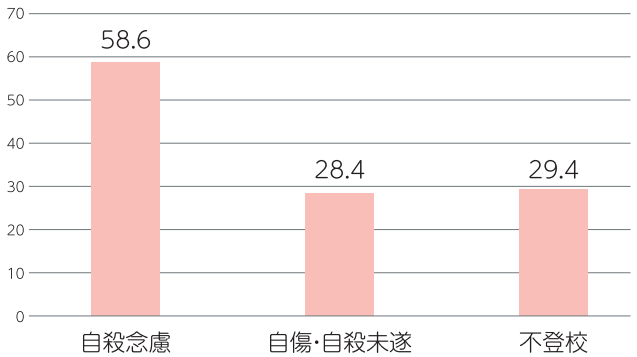
「厚生労働省エイズ対策推進事業ゲイ・バイセクシュアル健康レポート」
（2005年　有効回答数5731人）

○トランスジェンダーの生徒たちが苦しいと感じていること

・二次性徴が来ると、自分の体が女性化していくことが耐えがたく、自分が自分でなくなっていくような、恐怖や違和感に圧倒されるようになった。
・自分のことが自分で分からない。自分が受け入れられない。自分はおかしいと思ってきた。
・ずっと着ぐるみを着ているみたい。
・将来が見えない。
・女性更衣室にいると悪いことをしているように感じる。時間差で利用している。
・女子トイレに入るのに抵抗があった。
・月経時には自殺したくなった。
・毎日が罰ゲームのよう。
・(変声して) 声が低くなる・ひげが生えるのがいやだった。
・(女性と思われるような) 高い声が嫌だった。
・みんなでお風呂に入る修学旅行や宿泊学習が嫌で休んだ。

性同一性障害で受診した人の調査(%)

(1999～2007　1150人を対象に岡山大学ジェンダークリニックが調査・分析)



LGBTの学校生活に関する実態調査2013（ホワイトリボンキャンペーン）

暴力を受けた経験	LGBT全体	性別違和のある男子
身体的な暴力	20%	48%
言葉による暴力	53%	78%
性的な暴力	11%	23%
無視・仲間はずれ	49%	55%
暴力を受けた経験はない	32%	18%

生徒さんたちの声を拾ってみましたが、社会に出てからも、苦しいと感じることがあります。表現する性が身分証明書の性別欄と異なっている場合、パスポートや免許証の提示の時に見た目と異なるといって怪しまれたり、病院の待合で名前を呼ばれたときに、周囲からの好奇の目で見られて辛い思いをした、という人たちもいます。また同性愛者の場合には、大切に想いあう人がいて長年共同生活を送っていても、家族ではないという理由で病院の面会や付き添いを拒否されたり、手術や治療の同意書にサインさせてもらえなかったり、ということがありますし、パートナーが亡くなったときに遺産を相続出来ない、遺族年金を受給できない、という問題もあります。また、同性同士であるために教会で結婚式を拒否されることも少なくありません。海外では、同性婚に法的保護を与える動きが加速しつつあるともいわれますから、社会も少しずつ変わっていく方向にあります。教会の中にも、受付の記名簿の性別欄をなくしたり、また伝統的な「姉」「兄」という敬称を見直すことにした教会もあります。

一方で、性的マイノリティーの生徒がカミングアウトしたとき、言われてうれしかったという言葉を先ほどの調査から拾ってみましょう。

〇言われてうれしかったこと

・「大切なことを話してくれてありがとう。」

・「おまえはおまえで変わりないじゃん。」

・「性別がどうであっても〇〇 (名前) は〇〇でしょ。」

・「言ってくれてありがとう。何か近づけた気がするよ。」

・「あなたはもともと男の子なんだよね。男の子になりたい / なった」ということではではないんだよね。

私たちも、家族や同僚、また信仰の友から告白を受けることがあるかもしれません。その時に基本的な知識をそなえておきたいと思いますし、また相手を力づける受けとめが出来るようなオープンな心を持ちたいと願います。セクシュアリティは多様であるが故に、理解が難しかったり、自分の感性と合わないと感じることもあるかもしれません。けれども、さまざまな統計を勘案しても、性的マイノリティの人たちは、私たちの身近なところにも、教会の中にも確かにおられることでしょう。ですから私たちは、こうした性的マイノリティの人たちがカミングアウトしていくときに、その生きる力を奪うような言葉ではなく、その人たちを力づける言葉を語っていきたいと思います。そして、そのことをオープンに出来るような温かい雰囲気を、社会の中にも、教会の中にもつくり出していきたいと願うのです。

6．神さまはすべての命をいとおしむ

私たちは無自覚に誰かを傷つけてしまうことがあります。多数者として生きていると、知らず知らずのうちに少数者の存在に目をとめなかったり、声を聞かずに押さえつけてしまう傾向があるからです。差別は、自覚しないところで起こってきますし、マイノリティ同士の中でも起こりえます。さらにいうなら、人は意図的に弱者、少数者を見捨てたり、踏みつけたりすることもある。私たちは、そういう弱さから来る、悲しい歴史を負った存在でもあるのです。

キリスト教会には長く、性的マイノリティの人たちを差別し、苦しめてきた歴史があります。そしてそれは、今もいろいろな形で継続しています。牧師さんや教会員さんから、「それは罪だ」「あなたは異常だ」というメッセージを受け取って傷つく人たちは少なくありません。聖書には、同性愛を禁じているように読める箇所があるため、長い間、同性愛は宗教的に禁じられている、と理解されてきたのです。けれども、そのように理解されてきた箇所の多くは、当時の金持ちが、奴隷の少年に性的な行為を強要するような習慣を禁じるものであったり、とても愛とは呼べないような、強制的な性行為を非難するものであった、というふうに解釈されるようになってきています。この冊子で取り上げることは出来ませんでしたが、性的マイノリティのひとたちに対する聖書の立場については、ぜひ参考文献にある山口里子さんの著作をお読みいただきたいと思います。

律法の細部にこだわろうとする人に対して、パウロが「そういう人は律法全体を行う義務があるのです」(ガラテヤ 5:3) と述べているように、実際に私たちは、たとえ聖書に書いてあったとしても、食物や衣服に関する律法のすべてを守っているわけではありません。また、女性の

社会的役割を制限する聖書の規定なども、社会の移り変わりと共に乗り越えようとしてきたのです。聖書を根拠にして、悩みや孤独の中にある人たちを断罪したり、排除したりするのではなく、神さまは小さなひとりひとりを大切になさる方である、というイエスさまの教えに立ちながら、今の社会や教会が抱えているさまざまな問題を、ひとつひとつ乗り越えていきたいと思います。

人は誰でも弱さを抱えていて、そうした弱さが前面に出ると、自分と立場や指向が異なる人たちを排除したり、力で押さえつけたりしてしまいます。そして自分が多数者の側にいる時には、そのことに無自覚でいることが多いものなのです。だからこそ、声をあげられないまま教会の中にもおられるであろう性的マイノリティの人たちのことを思い、考え、学び、祈ることを大切にしていきたいと思います。

私たちひとりひとりが、神さまから心をひらいていただいくことによって、すべての人の命をいとおしんでくださる神さまの恵みについて、さらに沢山の人たちとわかちあっていきたいと願っています。

COLUMN

トランスジェンダーの人が性別変更を希望するとき

トランスジェンダーの人の中には、自分の体の性と性自認とのギャップに苦しんで、性別の変更を希望する人たちがいます。また、自分が望む性別で就職するために、あえて望んでいない性別適合手術を受ける場合もあります。

法的な性別変更には、性別適合手術の他にも、次のようにクリアしなければならない様々な条件があり、それらをすべて整えたうえで、家庭裁判所の審判を求めることになります。専門医による手術は、2018 年から一部が保険適用になったとはいえ、それでも様々な制度の壁があるうえ経済的な問題も伴いますから、誰もが希望している手術を受けられるわけではないのです（「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」2004 年施行 2013 年改正施行）。

戸籍の性別を変えるための医学的な条件

- 2 人以上の専門医が、性同一性障害という診断をしていること。
- 生殖腺がないこと、または生殖腺の機能がないこと。
- 望みの性の外性器に近いこと。

戸籍の性別を変えるための法的な条件

- 20 歳以上であること
- 現に婚姻していないこと
- 現に未成年の子がいないこと

■引用・参考文献
・パンフレット「先生に知ってもらいたい多様な性」平成28年度　岡山市市民協働推進モデル事業　プラウド岡山×岡山市教育委員会事務局指導課 作成
・パンフレット「子どもの“人生を変える”先生の言葉があります。」日高庸晴(研究代表)(2013.10)“HIV感染予防対策の個別施策層を対象にしたインターネットによるモニタリング調査・認知行動理論による予防介入と多職種対人援助職による支援体制構築に関する研究”による作成
・パンフレット「わが子の声を受け止めて～性的マイノリティの子をもつ父母の手記～」日高庸晴(研究代表)(2014.12)“個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究”による作成
・LGBTハンドブック「性はグラデーション」(2015.12)淀川区阿倍野区豊島区３区合同
・共同通信４７NEWS(2011.1.25)「半数以上が自殺願望　小学校入学前に違和感　性同一性障害の子どもたち」
・電通ダイバーシティ・ラボが「LGBT調査2018」を実施
http://www.dentsu.co.jp/news/release/2019/0110-009728.html

■参考図書
・『教会と同性愛－互いの違いと向き合いながら』
アラン･A･ブラッシュ(2001新教新書)
・『「レズビアン」という生き方 キリスト教の異性愛主義を問う』
堀江有里(2006新教出版)
・『虹は私たちの間に 性と生の正義に向けて』　山口里子(2008新教出版)
・『あなたが気づかないだけで神様もゲイもいつもあなたのそばにいる』
平良愛香(2017学研プラス)

この小冊子の作成にあたり、丁寧に原稿を読んでコメントくださった堀江有里さん、平良愛香さん、青木みおさんに感謝いたします。

発　行：日本福音ルーテル教会
製　作：日本福音ルーテル教会社会委員会
発行日：2020年3月
連絡先：〒162-0842　東京都新宿区市谷砂土原町1-1

多様な性を知るために